

一生消えない心の傷

内装業 (42歳)

私は死亡事故を起こし、現と別れたことが、私と知人、所在、市原刑務所に服役しています。一生消えない深い傷を負わせます。

ある日の夕方、仕事の打合せが知人の自宅近くだったので、仕事も終わったので食事でもどうかと知人を誘い、自分の車で迎えに行き、近くの居酒屋へ行きました。食事と飲酒をし、楽しい時間を過ごした。午前1時頃に帰ることにしました。

店に代行運転を呼んでもらい、先に知人を送った後、私の自宅へ向かいました。私は眠くなり、後部座席で少し寝ていました。目を覚まして外の景気を見ると、自分の家の方向と反対方向に進んでいるのが分かりました。

そこで代行運転手と道順の事で揉めてしまい、途中の飲食店の駐車場で止めてもらい、お金を払って帰ってもらいました。今思えば、この運転代行

道路の右側左側を歩いていないか探していました。その時、道路沿いにあるアパートの一室が深夜にもかかわらず、電気が点いていたので、一瞬その部屋に視線を逸らした時、ガシャンという音が車の左側から聞こえたので視線を戻した時、道路沿いに植えてある木に当たってしまったかと私は思ったのですが、すぐ止めて車から降りて見た時、壊れた自転車の隣に人が倒れているのが見えました。私は人を撥ねてしまったのだと分かりました。一刻も早く救護しなければと思い、倒れている人のもとへ駆け寄った時、血を流して倒れているのは知人だと分かり、必死に声を掛けながら救急車を呼び、警察に連絡をしました。

そして、救急車が来る間、ずっと助かって欲しい一心で声を掛け続けました。

救急車が到着し、私も知人と一緒に救急車に乗り、病院まで付き添いました。そして病院に着き、知人は処置室へ担架で運ばれて行き、私は病

院に来ていた警察官に事情を聞かれました。しばらくして、医師の方が私と警察官の所へ来て、知人の死亡を告げました。お願いだから助かってくださいと願っていましたが、死亡と告げられた瞬間に目の前が真っ暗になり、私は「死んでお詫びするしかない。」と思ったのと同時に、「もう何もかも終わりだ。」と心の中で思いました。そして警察官に現場に連れて行かれ、現場を確認した後、警察署で逮捕されました。

勾留された始めの1週間は寝ることさえできない精神状態でした。取調べもとても辛く、大変なものでした。そして、知人の通夜と葬儀は、勾留中の私の代わりに妻が行ってくれました。私も謝罪文を書き、弁護士からご遺族の方へ持って行って頂きました。

その後、私は保釈となり、すぐに謝罪に伺いたいと伝えて頂き、四十九日の法要が終わったら謝罪に来て下さいと言われたので、法要後に一人で伺い、謝罪をしました。ご遺族の方は、私に対して何も言いませんでした。大切な家族を殺した人間を目の前にして、憎しみで言葉が出なかったのだと思います。そして裁判も始まりました。私の罪名は、自動車運転過失致死と道路交通法違反です。判決は懲役2年になりました。

私はまだ服役中ですが、示談も成立し、出所してからが私のご遺族の方への償いが始まると思っています。受刑中に日々、償いのあり方について考えています。また私の代わりに友人たちがお墓参りをしてくれています。私の犯した事件や、命を奪ってしまった知人、そしてご遺族の方と向き合い、逃げる事なく、少しでもご遺族の方に認めて頂けるような行動を取り、一生、御供養と償いを続けて行きたいと思っています。

「贖いの日々」第50集より抜粋
転載・二次使用を禁止します。